

## フロンティアの功罪 ——『サムラー氏の惑星』小考

坂口佳世子

The Merits and Demerits of American Frontier  
—— An Essay of Mr. Sammler's Planet

SAKAGUCHI Kayoko

1969年11月20日、アポロ11号は人類初の月面着陸に成功した。これは60年代の終りまでに人類を月に送り、無事に生還させると約束してケネディ大統領が始めたアポロ計画の最終的成功である。奇しくも100年前の1869年5月にセントラル・パシフィック鉄道とユニオン・パシフィック鉄道がユタ州のプロモントリーで繋り、アメリカ大陸で最初の大陸横断鉄道が完成し、リンカーン大統領の公約の一つが果たされた。しかし、両大統領ともに暗殺され、自らの約束の実現を見ることはなかったのである。この他の点においても、1861年に大統領に就任したリンカーンと100年後の1961年にニュー・フロンティアのスローガンを掲げて大統領に就任したケネディは両者ともに黒人の公民権法に貢献するなど、その類似性がしばしば取り上げられているが、両者ともにフロンティアに関係している点においては、言葉の類似性以外の実質的関連性はさほど強調されていない。ソール・ベローは『サムラー氏の惑星』のなかで宇宙開発の意義についてふれ、さらにフロンティアとの関係について意義深い示唆をしている。本稿においては主人公サムラー氏と科学者ラル博士の対話を通して、アメリカの歴史におけるフロンティアの功罪について考察したい。

『サムラー氏の惑星』のメイン・テーマは「60年代のアメリカの混乱状況」であるが、第二次世界大戦後、甥のユダヤ系アメリカ人グルーナー医師にザルツブルグの難民収容所から救い出されてアメリカにやって来た老ユダヤ人である、主人公サムラー氏が「アメリカは崩壊しかかっている、少なくともよろめいている」<sup>1</sup>と表現している、1960年代後半のアメリカの混乱と無秩序状態が、登場人物の言動やサムラー氏の目を通して描かれている。この作品は主に主人公の意識の語り、登場人物との対話、ニュー・ヨークの描写で占められており、メイン・プロットを見つけるのは困難であるが、あえてメイン・プロットといえるのはインド人科学者ラル博士の論文盗難事件である。物語の初めで、サムラー氏の娘シューラがD. H. ウェルズの回想録をまとめようとしている父親のためにラル博士の「月の将来」という論文を講演後、

無断で持ち去り、それをサムラー氏が博士に無事に返すというものである。このストーリーについて作品中に割かれている紙数は非常に少ないが、注目すべきはサムラー氏と博士の対話の部分である。ふたりは被害者と加害者の父親という関係にありながらも、両者ともに知識人であり、仁徳のある人物であることから、お互いに相手を尊重し、意気統合し、会話の時間をもつ。ふたりの対話のテーマは月飛行、すなわち宇宙開発であり、その意義について、アメリカの歴史を考慮しつつ、ふたりは論じあっている。両者の対話に割かれている紙数の多さもさることながら、圧巻はその内容の高度さであり、意義深さである。それゆえにこの作品のメイン・テーマであるアメリカの混乱状況の解釈において大きな意味をもつものである。

60年代のアメリカは43才の若きケネディ大統領の就任により幕を開けた。彼は「いまだ知られぬ機会といまだ満たされぬ希望と脅威をはらんだ」60年代というこのニュー・フロンティアにたいして、国民ひとりひとりが新しい開拓者となることを望み、そして人種差別の撤廃、ニュー・ディールの流れを汲む福祉政策、貧困状況の改善、景気の後退抑制等のために働くことを約束した。しかし、同時に60年代はまさに冷戦下にあり、外交政策に関しては彼は強硬な路線を打ち出し、軍事費を15%も引き上げた。なかでも彼は前述のアポロ計画には福祉予算を削減し、大幅な予算を投入した。<sup>2</sup> その主な理由は57年にソ連が初の人工衛星スプートニクの打ち上げに成功し、これにより、ソ連は大陸間弾道弾によりアメリカ本土を直接攻撃することが可能になったことが挙げられる。この人工衛星打ち上げに遅れをとったことがNASAの設立に繋がり、アメリカはこのあと積極的に宇宙開発に取り組んでいくことになる。ケネディ大統領がこのアポロ計画に固執する最大の理由は月面着陸に関してソ連に勝つことであり、またそのテクノロジーの開発を戦力兵器の開発に利用することでもあった。彼は公にはこのアポロ計画により、「新たな職場」、「新たな知識」、「新たなテクノロジー」が生み出されることになると述べ、さらに「別の世界への人類初の旅はいかなる恩恵が待ち受けているか分からない」とまさにかつてアメリカのフロンティアがもたらした恩恵を国民に想起させた。

このように希望に満ちた幕開けであったがサムラー氏が「よろめいている」と述べているように60年代後半のアメリカは社会秩序の乱れた、まさに混乱状況に陥っている。大都市では暴力や犯罪や黒人暴動が多発し、性風俗は乱れ、若者たちの無軌道な行動、暗殺、ベトナム戦争の泥沼化等、国内外に様々な解決困難な問題が山積していた。このような状況をサムラー氏は登場人物を通して象徴的に物語っている。

まず、サムラー氏に犯行現場を目撃され、警察に通報したことで自らの男根を見せつけて威嚇する黒人スリは大都市の犯罪の多発と犯罪者の野放図状態、危険性を表わしていると同時に大都市における警察力の慢性的不足を示している。この慢性的警察力不足に関して、警察はサムラー氏に「要人の警護や大集会」ための警察動員を理由に挙げ、大都市の犯罪の野放図状態の弁解をしているがこれは68年のキング牧師、ロバート・ケネディの暗殺や、69年の反戦大集会等に代表されるベトナム反戦運動を反映しており、また新公民権法の成立にもかかわらず多くの黒人が苦しんでいる貧困状況やさらには黒人運動家にたいする白人の残酷な対応、それに対する黒人の大暴動の頻発を示唆しており、これらが大都市の混乱と危険な状況を生み出す大きな要因となっているのである。またこの黒人スリは60年代の「ブラック・イズ・ビューティフル」のアイロニカルな象徴ともなっている。

さらにこの作品の主な登場人物となっているグルーナー一家はアメリカ社会における貧困の格差、カウンター・カルチャー世代の若者の無軌道な行動、倫理観の喪失、家族の崩壊等を物語っている。当主のグルーナー医師は旧世代の人情や義理、責任感にあふれた、親切で思い遣りのある人物としてサムラー氏は高く評価しているが、その彼ですらマフィアとの繋り、違法な堕胎手術による蓄財等があり、アメリカの手段を選ばぬ物質的成功を反映しており、また「スラム街から郊外の公爵」へのサクセス・ストーリーの誇示のための豪華な別荘はアメリカン・ドリーム象徴であると同時にサムラー氏の眼に映るニュー・ヨークの低所得者層の安アパートのむさくるしさとのコントラストゆえに貧困の格差を強調している。

グルーナー医師の息子のウォリスは物質的豊かさのなかで育った自己中心的な若者たちを代表しており、また父親の生き方を批判しつつも、その財産を当てにし、父親が死に面しているときですら、その隠し財産探しに熱中しており、まさに家族の崩壊を象徴している。この隠し財産を見つけだし、アメリカにおける金銭的重要さを理由にそれを着服しようとするサムラー氏の娘シューラはラル博士の論文の無断拝借を含めて、目的のためには多少の違法行為も辞さぬというアメリカ社会の倫理観の欠如を表わしていると同時に、サムラー氏よりもアメリカでの居住期間が短いにもかかわらず、すでにアメリカの生き方に影響されているとサムラー氏が嘆いているように、アメリカの同化力の大きさを明確に物語っている。グルーナー医師の娘アンジェラは教養もあり、性的な魅力にあふれた美人であるが、父親から「色気違い」「まるで雌牛」と罵られているように、彼の財力ゆえに自由奔放な、性的に乱れた生活を送っており、娘を愛している父親の大きな苦悩の原因となっている。彼女はまさにアメリカの性風俗の乱れを象徴しており、サムラー氏がアメリカで最も成功したものとして精神分析とともに挙げる「性革命」の皮肉な結果的社会現象を物語っている。

このように60年代後半は、明るく希望に溢れた幕開けから一転して、サムラー氏が「狂っている」とまでいう、混乱状況を呈している。このような現実のなかで冒頭の人類初の月面着陸の意義を単にアポロ計画の最終的成功としてではなく、この偉業と現状との関連性について、アメリカの歴史におけるフロンティアの意義を考慮しつつ、再度検討してみよう。

フロンティアは元来国境地線という意味であるが、アメリカでは人口1平方マイル当たり2ー6人の人口の少ない、荒野に隣接した「開拓地」、「辺境」を指す。このフロンティアの存在こそがまさにヨーロッパからの移民がアメリカ合衆国という、全く独自の国家を生み出した最大の要素であるといっても過言ではないだろう。F. J. ターナーによれば、フロンティアこそがアメリカ独自の政治形態や文化を生み出したのである。しばしば言及されているが、フロンティアは経済的、社会的向上にたいする機会の平等、それに伴う民主主義や個人主義、さらに、「開拓者精神」といわれる、進取の気性、創意工夫、勤勉の精神、地理的、社会的移動性を生みだし、同時に物質主義、使い捨て、反主知主義の精神も生み出した。

しかしここで注目したいのは1860年代、リンカーン大統領就任当時におけるフロンティアのもつ意味である。まず第一に挙げられるべきはこのフロンティアの存在が南北戦争の大きな要因になったことである。南北戦争以前のアメリカ経済は基本的には南部の綿花産業に依存していたが、西部の出現により、農業機械や生活必需品の需要が増加し、北部の工業化を促進した。また、西部は北部の労働者にたいする食料を供給し、北部と西部の相互依存的関係がで

き上り、これにより、南部への依存減少、さらに南部の孤立化が進んだ。一方、奴隷制に関しても、奴隷州の確保を必要とする南部と倫理的観点から奴隷制廃止の気運の高まる北部との間の対立は深まった。このような状況で南北戦争の直接のきっかけとなったのはリンカーンの大統領就任であるが、彼はその公約として労働者には「5年間の居住を条件に160エーカーの土地を無償で家長または21才以上の合衆国市民に払い下げる」という「自営農地法」を、資本家には保護関税貿易、内陸開発、大陸横断鉄道を約束した。そして1963年に奴隷解放宣言が行なわれ、1864年の憲法修正第14条で黒人の市民権が保証された。このように南北戦争後の社会は市民の平等が保証され、北部の労働者には西部の「自由な土地」が約束されて、一見「自由、平等、幸福の追及」という独立革命の理念が実現されたかのように見えるが、現実には1960年代の黒人の市民権運動が示しているように全く異なったものであった。一方、経済に関しては、南北戦争後、西部フロンティアの存在により北部の工業化は急速に進み、20世紀初頭にはアメリカは工業生産高世界第一位の工業国家へと発展した。

このように、フロンティアの存在はまさに現代のアメリカ社会を生み出す最大の要素であったわけだが、『サムラー氏の惑星』のなかでラル博士はこのフロンティアと宇宙開発の意義についての関連性について言及し、その計画の否定的な面を認めつつも、次のように述べてその意義を高く評価している。まず第一に「もちろんこういう探検には多くの反対があります。学校や貧民窟などに向けるべき予算がそちらに奪われているという非難ももちろんあります。ペンタゴン関係の出費のために社会改革が手控えられているといわれているようにね。……アメリカ人は以前から無鉄砲な浪費家でした。良くないことには相違ないが、実り多い乱費だといえる場合もあります。浪費もそれが発明心、独創心、冒険を許すかぎりには正当化されているはずですよ」(217)と述べ、この計画が、アメリカ人の開拓者精神から生じた「発明心、独創性、冒険心」を有効に生かす機会を与えるものであり、ケネディ大統領がこの計画を「信念とヴィジョンの行為」であり「この先にどのような恩恵が待ち受けているかわからないのだから」と述べたように、宇宙というニュー・フロンティアがかつてフロンティアのもたらした恩恵をもたらすであろうことを示唆している。しかし一方で「不幸なことにはその結果は通例がたいていは腐敗墮落であり、悪銭を稼がせたり、プレイ・ボーイ的なレクリエーションにふけらせたり、反動的な資産を築かせたりするものになっています。政府に関するかぎりでは、月への探検旅行は疑いもなくこのうえもない宣伝ですよ。見世物事業ですよ」(217)と述べ、南北戦争後のアメリカ社会における、政治的腐敗、富の追及のみに専心する市民の倫理的墮落、強烈な財産所有権の主張、また、1960年代の「プレイ・ボーイ」紙が宣伝する、金持ちのみが享受できる「真のセックス」を示唆し、現代アメリカ社会の秩序の混乱とフロンティアとの関連性の否定的な面も認めている。また、この宇宙探検がアメリカの国力の誇示であることも指摘している。

第二の意義として、「魂も間違いなくこの業績の壮大さを感じ取っているのですから。人間の行けるところに行かないということは進歩の阻害になりかねません。きっと魂もそう感じていることでしょうし、したがってそれは必要なことなのです。それは新たな厳粛さをもたらすかもしれません」(217)と述べ、この宇宙開発計画は「進歩」への人間の持つ可能性とそれを実現させる人間の偉大さを認識させるものであるという。しかし、この計画に関しては、人々に感銘を与えるものはそのテクノロジーであり、宇宙飛行士は単なる「超チンパンジー」的存

在となり、これからはむしろ技術者があがめられる時代となるという。この見解はまさに60年代のカウンター・カルチャーが否定する、後期産業資本社会における、非人間的、テクノロジー社会のますますの発展を示唆するものである。

さらにラル博士は「私の主張の一部分は合衆国の歴史に論拠を置いているのですから。1776年以後は自国内に広がっていける大陸があり、その空地があらゆる誤謬を埋没してくれました。……1789年以後のヨーロッパはその誤謬を埋没できる空地がなかったのです。その結果は戦争と革命」(218)と述べ、この計画を合理的に正当化できる理由をアメリカの独立革命とフランス革命とを比較対照しつつ、アメリカの歴史から引き出している。つまり彼はアメリカの歴史において、フロンティアの存在が様々な矛盾をはらんだ、いわゆる閉塞の状況における風穴的役割を果たしたことを示唆している。前述のごとく、南北戦争後のアメリカ社会は一見、「自由、平等、幸福の追及」という独立革命の理念を実現したかのように見えるが、現実には北部の労働者は資本家たちに搾取され、貧困生活を強いられ、黒人たちは人種差別に苦しんでおり、豊かさを享受していたのは一部の人々だけであった。この時、北部の労働者たちに夢と希望を与えたのがフロンティアである。リンカーンの「自営農地法」成立に関しては労働力の流出を理由に一部の資本家たちは反対したが、ヨーロッパの状況から判断して、近い将来起きるであろう労働争議を未然に防ぐために、つまり労働者の不満の捌け口としてこれを容認したのである。

簡言するとフロンティアの存在が自由で平等な機会均等の国アメリカの象徴的イメージを作りあげ、あらゆる矛盾や誤謬を隠蔽することに貢献したといえる。このような観点から、ラル博士はこの宇宙開発計画は「世界で最も模範的国と宣伝されている」とサムラー氏が皮肉っている、「理想的国家」のイメージ作りに貢献し、60年代のアメリカ社会における、貧困の格差や人種問題その他の多くの矛盾を隠蔽し、現体制に不満を抱き、閉塞感を感じている人々に夢と希望を与え、解放感を与えることで、いつか爆発するかもしれない彼らの不満の風穴的役割を果たしていることを示唆している。つまり、ラル博士がこの月への探検旅行を政府の宣伝、見世物であるといっているように、この宇宙開発計画はアメリカのテクノクラシーの宣伝であり、その成功はすなわちアメリカの豊かさとテクノロジーとますますの発展の可能性の誇示であり、結果的には現体制の維持に繋るのである。

さらにラル博士は人口過密のインドや中国の人々が感じている閉塞感を例に挙げ、人類が欲している逃れ道、そしてそれを可能にするであろう人間の知力と技術にたいする期待感をこの計画が実現させてくれるものであるといい、この成功はアメリカだけでなく、世界の人々にとっても同様の感銘を与えるものであることを示唆している。これはすなわちこの計画の成功が冷戦下における自由主義陣営の宣伝にも繋り、共産主義の「封じ込め」にも貢献することを意味している。

一方、サムラー氏の宇宙開発計画にたいする見方は博士との対話以前と以後では特にその見解の深さにおいて異なっている。対話以前はサムラー氏は「地球を脱出し、真空のなかにプラスチックのイグルーを建て、必然的には厳しい生活であるが、静かな植民地に住んで、化石の水を飲み、基本的問題のみを考えて暮す有利さは見てとれる」(53)と述べ、あらゆる過去や伝統や慣習からはなれ、基本的な問題のみを考えようとしたソローの「森の生活」のパロディとしてこの計画をとらえ、宇宙開発にさほどの価値を見いだしていない。また、次のような光景から、一時的に月光の美しさに想像力を掻き立てられ、宇宙開発にいちるの夢と希望を託し

たいという気持にも駆られている。

彼らはハドソン川沿いのウェスト・サイド・ハイウェイに出た。そこには水があり、——その何という美しさ、不潔さ、陰険さ！ 性的暴力やナイフを突き付けての強盗や殴打や殺人の目隠しになる、灌木の茂みや木立ちもある。水面には橋の電灯や月光の光線が滑らかにのびていて、愉快なほど光り輝いている。我々がこうしたことの全てから飛び立ち、人間生活を外界に持ち出したとしたら？ 今この瞬間異例なほどの混乱状態にある人類にとっては冷静さを取り戻す効果があるかもしれないとサムラー氏には想像したい気持があった。暴力は収まるかもしれないし、高揚した観念が重要さを回復するかもしれない。いったん我々が地球的な条件から解放された場合には。(181)

しかしラル博士との対話においては、このテーマに関しての彼の幅広い、専門的知識から引き出された宇宙開発の意義について耳を傾けた後、サムラー氏は現実的、かつ合理的見解を述べている。なかでも博士が宇宙開発の合理的正当化の理由としてあげた「宇宙＝臨時牢獄からの脱出」の意見にたいして、「もしそれが合理性の問題であれば、その場合は、まずこの惑星上に正義をきずくことこそが合理的でしょう。そのうえで我々が聖人たちばかりの地球をもち、我々の心が月を望んでいた場合には、我々が作った機械に乗り込み、舞い上がることができるわけですし……」(237)と述べている。サムラー氏のこの見解の底には人々が現在の人間性を保持したうえでどのような土地に飛び出そうと究極的には同じ状況を生み出すはずであるという根本的考えがある。すなわちソローが森の生活に終止符を打った理由として森の生活を始めて一週間もたたないうちに小屋から池までの小道ができあがってしまったからであるというように、人間がどのような新天地に脱出しようと人々は生活していくなかで合理化や必要性のために同様の制度や慣習を作り上げていくであろうということである。

またこのテーマに関してサムラー氏はラル博士と同様、アメリカの歴史を背景に説明している。新大陸に神の国を築こうとしてアメリカにやって来たピューリタンたち、そして彼らの子孫たちが成し遂げた、「自由、平等、幸福の追及」という「不可譲」の権利を理念とした独立革命、これらは結果的には失敗に終わったと彼はつぎのようにいう。「多くの点で正義の勝利であったこの革命が——奴隷は解放するのが当然であり、殺人的な労働は廃止するのが当然であり、魂は自由をもつのが当然でしょうからね——ところがこの革命が同時に新たな苦悩と悲慘を持ち込んでおり、今までのところではしごく大ざっぱに言えば全的に成功だったとはいえないことは明らかです。……我々は極端な醜悪さに落ち込んでいます。この国の新たな個人たちが新たな余暇と自由を享受していながら、苦悩にあえいでいるのを眼にすると戸惑わされます」、「心は真の意味での賃金が得られず、魂はなんらの栄養も見いだせない。虚偽は無制限。欲望は無制限。可能性は無制限。複雑な現実にはたいする不可能な要求は無制限」(228-29)彼がこのように述べる背景にはフロンティアが大きく関係している。前述のごとくフロンティアの存在は近代国家アメリカの独立の理念を実現し、一見平等で、個人の自由が尊重され、また機会の均等が約束された民主主義国家を作りあげたかのようなのであるが、現実的には、同時にアメリカの工業化を促進し、道徳的に退廃した、弱肉強食の物質主義国家を生み出した。第二次世界大戦後、アメリカはさらに豊かさと合理性を追及するためにテクノロジーを発展させ、人間性の欠如した、抑圧的、テクノクラシー国家を作りあげた。つまり、フロンティアが生み出した個人主義は利己的な財産所有権の主張に化し、反主知主義、物質主義は広く行き渡り、フロンティアは人間の欲望と可能性を追及し、実現させる象徴的な場としてとらえられるように

なったのである。したがって60年代の様々な解放運動の盛り上がりにもかかわらず、結果的には人々は真の自由、すなわち「魂の解放」「魂の自由」は得られていないのである。

つまりこのアメリカの歴史的事実を踏まえたうえで宇宙開発の意義を考えると、たとえ新たな空間に人々が脱出しても、人々が変わらないかぎり、結果的には同様の結果が生み出されることになる。さらにケネディ大統領が約束したようにテクノロジーはますます発展し、全面的にテクノロジーに依存する非人間的社会が生み出されるだろう。サムラー氏はウェルズの科学宇宙小説『宇宙戦争』に言及し、「あの小説では火星人が人類を抹殺しにやって来ます。彼らはアメリカ人が野牛やその他の動物にたいしてとってきたのと同じやり口で、そういえば、アメリカン・インディアンにたいしても同様でしたが、人類に立ち向かっているのです。絶滅です」(210)と述べ、アメリカ人がフロンティアにおいてネイティブ・アメリカンを虐殺したことを想起させ、新たな「宇宙戦争」が人類を滅亡させる可能性を示唆している。つまり、この場合の「宇宙戦争」は他の惑星間とのものではなく、むしろ冷戦下における核兵器戦争であるが、宇宙開発によるテクノロジーの発展が戦略兵器の開発にさらに拍車をかけ、地球全体を終末的状况に導く可能性を増大させるということであろう。

このようにサムラー氏はラル博士の意義深い見解に耳を傾けたあとも結果的にはこの宇宙開発が現状の悪化に繋がることはあっても、人々が真に求めているもの、すなわち「魂の自由」を与えられないという結論を出す。そして、人々が「魂の自由」を得られる社会を作り出すために、もし何かできることがあるとすれば、「それはおそらく自己の内部に秩序をもつことでしょう。……おそらくそれこそが愛なのでしょう」(228)という。これはすなわち、様々な問題をはらんだ閉塞状況において、これまでヨーロッパやアメリカの人々は外側に脱出して、問題を解決してきたわけであるが、今こそ、原点に立ち返り、内側に目を向けるべきときであることを示唆している。つまり、自己の内部に深く分け入り、この内なるフロンティアのなかに潜んでいるはずのかつてのピューリタンたちの愛と信仰心、そして独立を勝ち取った先祖たちの正義感、道徳感を探しだしつつ、自らの精神に秩序をもたらし、さらに自己に与えられた役割や使命を愛の精神をもって果たすことが現在の混乱状況の正常化、人々の真の解放に貢献するであろうことを意味している。サムラー氏のこのメッセージは60年代だけでなく、21世紀に入ってもいまだに秩序の正常化の果たせない、現在の我々も耳を傾けるべき価値のある意義深いものである。

#### (注)

1 Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (New York : The Viking Press., 1970) 284. 以下の引用はこの版からで、頁数は本文中括弧内に記す。日本語訳は『サムラー氏の惑星』(新潮社、1974年)橋本福夫訳を参考にさせていただいた。

2 ケネディ大統領のアポロ計画に関しては主に『人類、月に立つ』(上)を参考にした。

## (参考文献)

Thoreau, Henry David. Walden or Life in the Woods. New York: The Book League of America. 1929.

有賀貞他編 『アメリカ史 1』 山川出版社 1994年

———— 『アメリカ史 2』 山川出版社 1993年

ジョンソン、ポール 『アメリカ人の歴史 III』 別宮貞徳訳 共同通信社 2002年

ターナー、フレデリック・J 『フレデリック・J・ターナー』 渡辺真治他訳 研究社 1975年

———— 『アメリカ史における境界』 松本政治他訳 北星堂書店 1973年

チェイキン、アンドルー 『人類、月に立つ』 (上) 亀井よし子訳 日本放送出版協会 1999年

メアリ・ベス他 『アメリカの歴史 6』 上杉忍他訳 三省堂 1996年